下老子笹川遺跡

2015年3月

富山県埋蔵文化財センター

富山県

目　次

はじめに・・・・・・・・・・・・・・・2
下老子笹川遺跡について・・・・・・・・2
土器・・・・・・・・・・・・・・・・・・4
玉作り関係出土品・・・・・・・・・・・10
その他の出土品・・・・・・・・・・・・15

はじめに

富山県埋蔵文化財センターでは、本県にとって重要な出土品をみなさまに紹介するため、平成19年度からパンフレット等を刊行、本書は９冊目にあたり弥生時代の下老子笹川遺跡の出土品を紹介しました。

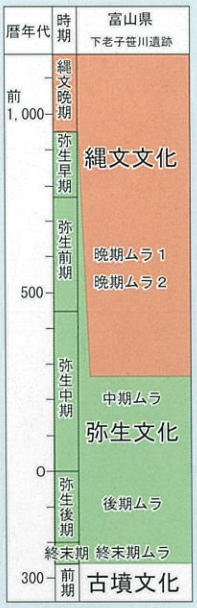
さてこのパンフレットが刊行される頃、北陸新幹線が開通します。北陸新幹線建設に伴う発掘調査では貴重な成果がありました。下老子笹川遺跡もその一つです。

下老子笹川遺跡について

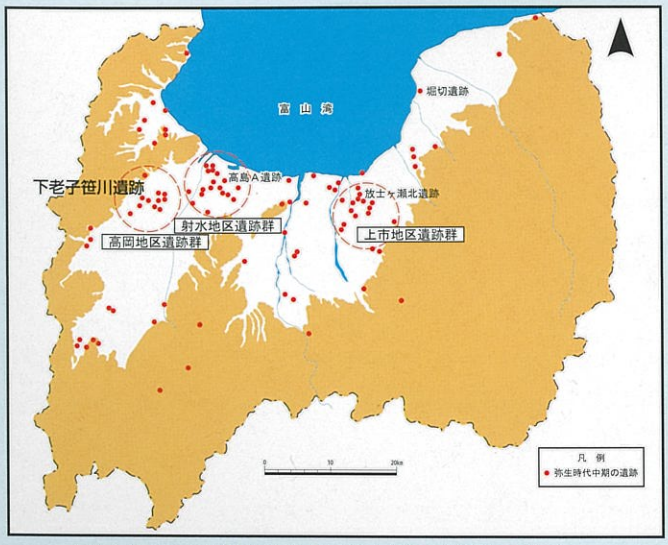
北部九州で大陸から稲作文化が伝わった頃、富山県はまだ縄文時代が続いていました。本格的に稲作がはじまるのは弥生時代中期とされています。そのため西日本の弥生時代前期は富山県においては縄文時代晩期です。

下は富山県の弥生時代中期の主な遺跡の分布図で、10か所以上の遺跡が群を成している箇所が３か所あります。ここでは便宜上、東から上市地区遺跡群、射水地区遺跡群、高岡地区遺跡群と呼ぶこととします。紹介する下老子笹川遺跡は高岡地区遺跡群に属しています。

高岡地区遺跡群は庄川と小矢部川にはさまれた庄川扇状地扇端部の標高10～20m地帯です。このあたりは地下水位が高く水利の良い場所であったことも稲作を行うため弥生時代のムラが集中したと考えられます。



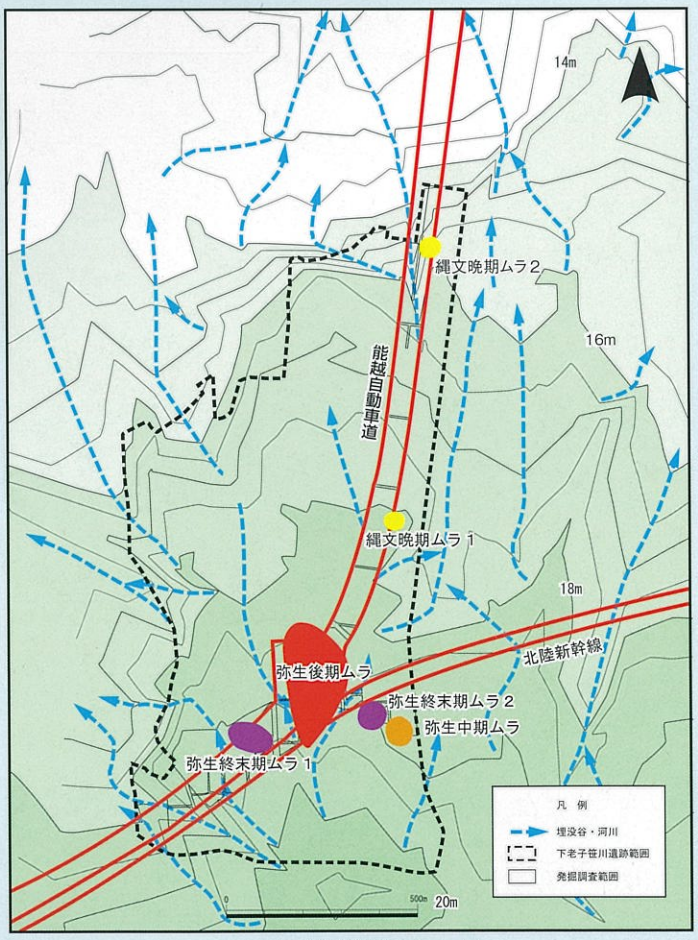
ムラの時期



富山県における弥生時代中期の遺跡の分布

下老子笹川遺跡は、高岡市笹川・千鳥ヶ丘、高岡市福岡町（旧西砺波郡福岡町）下老子・一歩二歩に広がる南北1.8km・東西700m・面積約1㎢と広大な遺跡です。遺跡の時期は縄文時代から近代と長期間です。今回紹介する出土品は縄文時代晩期、弥生時代中期、弥生時代後期、弥生時代終末期の各時期に営まれたムラで使われたものです。

下老子笹川遺跡の位置



下老子笹川遺跡のムラ

●縄文時代晩期のムラ

縄文時代晩期のムラは、縄文晩期ムラ１と縄文晩期ムラ２があります。ムラにある住居の平面形は円形もしくは不整形で、中央に炉があります。住居は竪穴住居ですが、掘りこみが極めて浅くなっています。

●弥生時代中期のムラ

弥生中期ムラは、川の左岸に住居８棟が築かれていました。この内２棟では玉作りが行われており周りには幅１ｍ前後の溝が掘られています。その他の住居は小規模で柱穴や炉が無く、小屋のような用途と考えられます。

●弥生時代後期のムラ

弥生後期ムラは、南北250m・東西150mと大きな規模となり、高岡地区遺跡群の中心的な役割を果たしていたと考えられます。住居は、17棟の周りに溝が附属し、13棟は玉作を行っています。住居の規模は様々で20～100㎡です。大型の住居は玉作工房となっています。

●弥生時代終末期のムラ

弥生終末期ムラは後期ムラに比べると小規模になっています。ムラ１は南北の端を溝、東側を柵によって区画された80m×70mの空間に住居４棟・倉庫４棟・小屋４棟があり、コンパクトながらもムラの様子がわかります。

縄文晩期ムラ1

弥生中期ムラ

弥生後期ムラ北側

弥生後期ムラ北側の焼失住居

弥生後期ムラ南側

弥生終末期ムラ1

土器

土器は粘土で作られるため、大量に作られ、使われる時間も短く時間（時期）や地域によって変化し、普遍的に存在するものです。そのため土器を秩序立てて、整理・分類することにより年代区分の基準資料となるものです。下老子笹川遺跡出土土器は、縄文時代晩期から弥生時代終末期までの長期間のものがあり、年代区分の基準資料として重要です。

●縄文時代晩期ムラの土器

土器は２時期の変遷があります。西日本では、縄文晩期ムラ１の出土土器は縄文時代晩期末に、縄文晩期ムラ２の出土土器は弥生時代初頭に位置付けられています。土器の種類は、煮炊用の深鉢、貯蔵用の壺、盛付用の浅鉢・鉢があります。縄文晩期ムラ１の土器は、深鉢が大半を占め、口や肩部に文様がみられます。鉢には赤く塗られた平面形が楕円形のものもあります。縄文晩期ムラ2の土器は、深鉢の文様が少なくなります。左の壺は東海地方の土器の特徴をもつものです。

深鉢（1/6）

鉢（1/6）

壺（1/6）

●弥生中期ムラの土器

土器は縄文文化の縄文土器ではなく弥生文化の弥生土器へと大きく変わっています。土器の種類はコメなどを煮炊する甕、水や種籾などを貯蔵する壺、食事を盛付る鉢があります。甕は、縄文晩期の深鉢に比べてやや張った卵形の胴に、外に開く口がつく形態のもので、口から肩にかけて文様があります。壺は、容量の大きな丸い胴のもの、卵形の胴のもの、小さな胴の途中で大きくふくらむものがあります。写下の中段左側の小さな壺は東海地方の土器の特徴をもつもので上半分に細かな文様があります。右の大型の壺は肩に小さな円で付けられた文様が巡っています。鉢は平底から口縁部が外に開く形態のものです。無頸壺は、文字どおり頸の無い壺で口の下には蓋をとめたと考えられる孔があります。

甕 (1/6)

鉢 (1/6)

無頸壺 (1/6)

壺 (1/6)

●弥生後期ムラの土器

土器の種類は、煮炊用の甕、貯蔵用の壺、盛付用の高杯・鉢の他、供用の台付壺・器台や甑ではないかとされる有孔鉢が加わり中期に比べるとバラエティに富んでいますが、装飾はほとんど施されません。甕は中期に比べると底が小さくなりますが、口には様々な形をするものがあります。中でも右下のものは東海地方の特徴の口をしています。壺は頸が短かく、まっすぐ斜め上に伸びるものが多くなります。器台は、口と脚に文様があるものと無いものの2種類があります。台付壺は壺と器台を組み合わせた形態です。高杯は盛り付けをする上部と脚のバランスがとれた形態をしています。また、この時期の特徴として北海道・東北地方や山陰地方など遠隔地の土器の特徴をもつものがあり、各地との交流や年代の並行関係を示す重要なものです。

甕（1/6）

台付壺（1/6）

壺（1/6）

器台（1/6）

高杯（1/6）

鉢（1/6）

底

有孔鉢（1/6）

台付鉢（1/6）

台付壺（山陰地方）

甕（北海道地方、恵山式土器）

甕（東北地方、天王山式土器）

文様

他地域の特徴のみられる土器（1/6）

●弥生終末期ムラの土器

後期にみられた他地域の特徴を示すものは少なくなり、北陸独自の形態の土器が中心になります。土器の種類は煮炊用の甕・有孔鉢、貯蔵用の壺、盛付用の高杯・鉢、供用の台付壺・器台のほか、蓋が多くなります。甕は後期よりも底がさらに小さくなり、すぼまった形の胴になります。壺は文様のあるものは少なくなり、短かくまっすぐ伸びる壺に代わって口に段がある壺が増えてきます。高杯は、後期と比べると皿状の上部に比較し脚が小さいアンバランスな形態に変化し、皿状の上部の底が丸いものが新たに加わります。器台も高杯と同様に土器をのせる部分が大きく、脚が小さいアンバランスなものへと変わっていきます。鉢も口に段があるものが増えてきます。蓋は大小様々な大きさのものや、細い口の壺の口にぴったりとおさまるように返しの有るものがあります。また、革袋形土器の様な特殊な形をしたものもみられます。

甕（1/6）

壺（1/6）

器台（1/6）

高杯（1/6）

皮袋形土器（1/6）

台付壺（1/6）

鉢（1/6）

底

有孔鉢（1/6）

台付鉢（1/6）

蓋（1/6）

玉作り関係出土品

北陸の弥生時代ムラでは、米作りを行いながら、玉作りがおこなわれていました。下老子笹川遺跡でも、南西の弥生中期ムラと南側中央の弥生後期ムラの２箇所のムラで玉作りが行われていました。

下老子笹川遺跡の様に一つの遺跡で弥生時代中期と後期の二時期の玉作工房が確認されることは全国的にも珍しい例とされています。

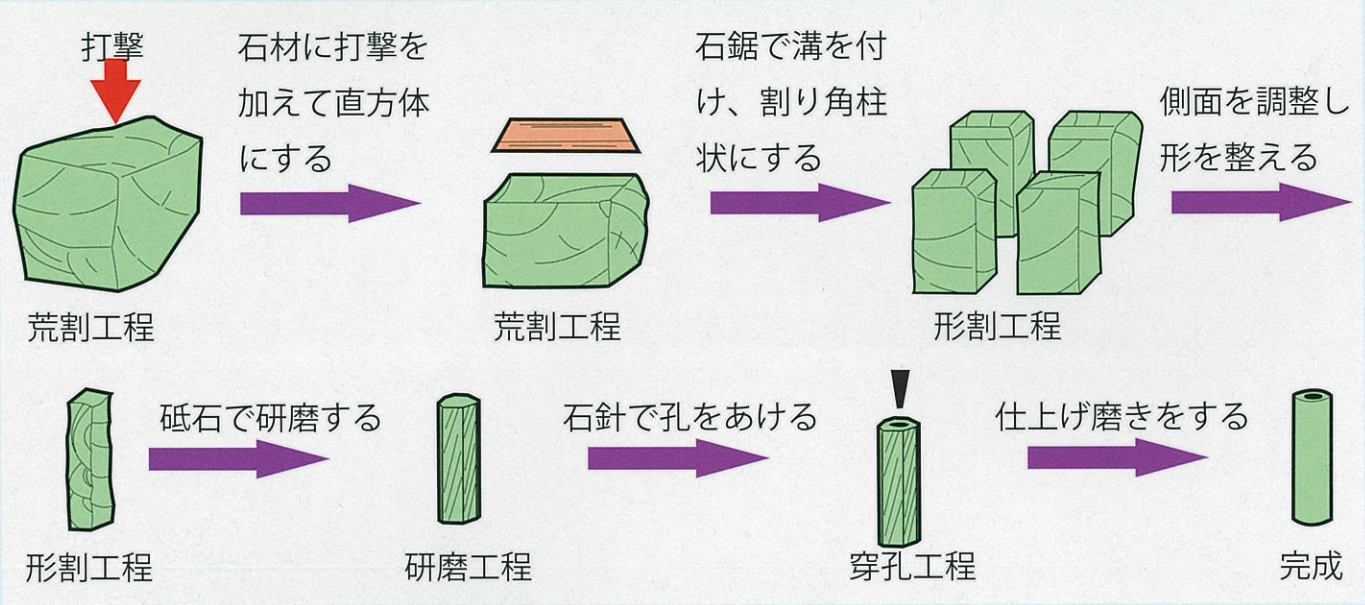
●弥生中期ムラの玉作り関係出土品

弥生中期ムラでは住居２棟で緑色凝灰岩の管玉が製作されていました。玉作りに関係する出土品には、管玉製作の各工程の未成品と石鋸、石針、敲石、砥石など工具があります。

管玉の制作工程は、ムラの外から運んできた石材を、①敲石で石材に打撃を加えて直方体にする荒割工程、②石鋸で溝を付け割り角柱状にする形割工程、③砥石で研磨し多角柱にする研磨工程、④石針で孔をあける穿孔工程、⑤仕上げ磨きをする仕上磨工程にわけられます。

敲石の表面には打撃を加えた痕跡がみられます。石針は太さが１mm以下とシャープペンシルの芯よりも細いものです。また、砥石は左が凝灰岩質泥岩、右が流紋岩と肌理が異なるものが見つかっています。

荒割工程品には石鋸で付けた溝が見られます。穿孔工程品には両側から穿孔した痕跡が見られます。



管玉の製作工程（弥生時代中期）

石鋸（1/2）

石針（1/1）

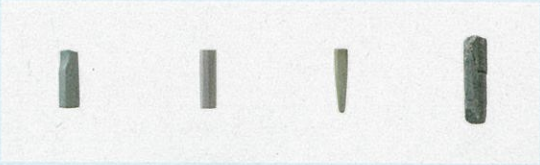
敲石（1/2）

砥石（1/2）

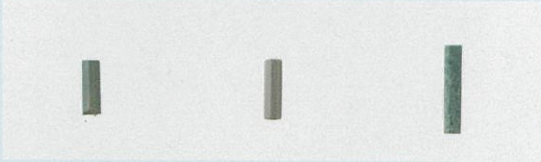
玉作の道具

あらわりこうていひん
荒割工程品（1/1）

かたわりこうていひん
形割工程品（1/1）



けんまこうていひん
研磨工程品（1/1）



せんこうこうていひん
穿孔工程品（1/1）

いしのこ　こんせき
石鋸の痕跡

いしばり　こんせき
石針の痕跡

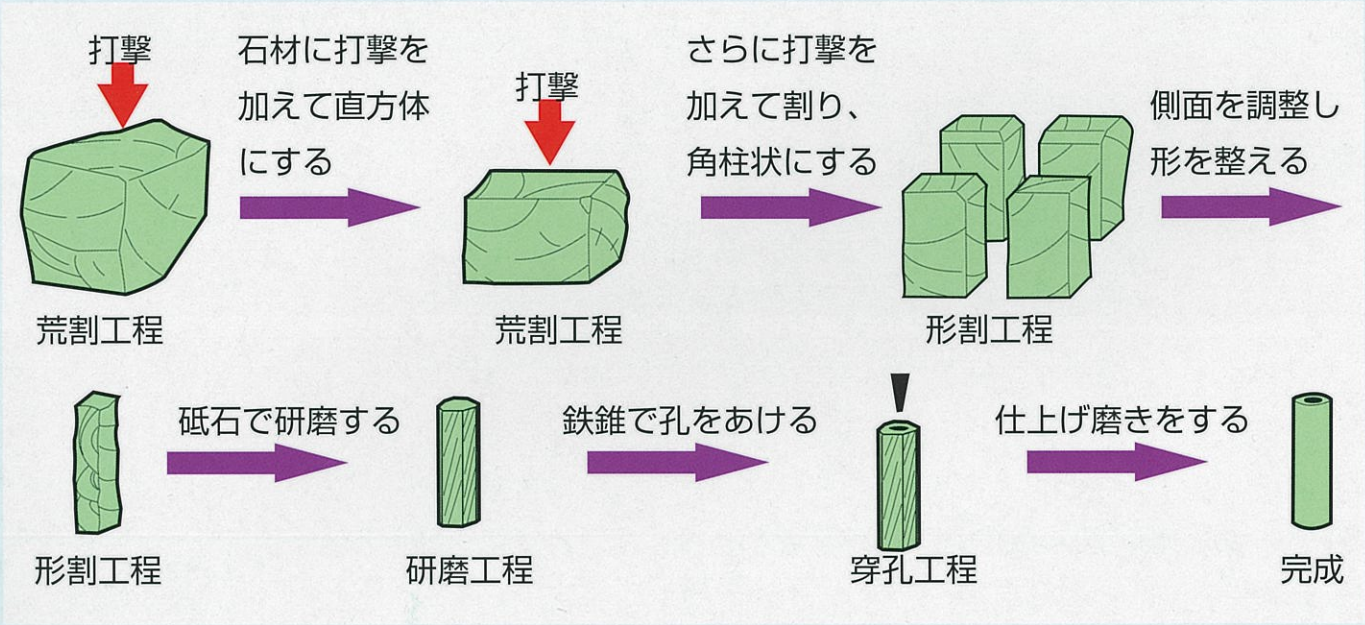
●弥生後期ムラの玉作り関係出土品

弥生後期ムラでは、１３棟の住居で勾玉と管玉の玉作りが行われていました。玉作に関係する遺物には、勾玉・管玉の各製作工程の未成品及び敲石、砥石の他、鉄錐などの工具も出土しています。

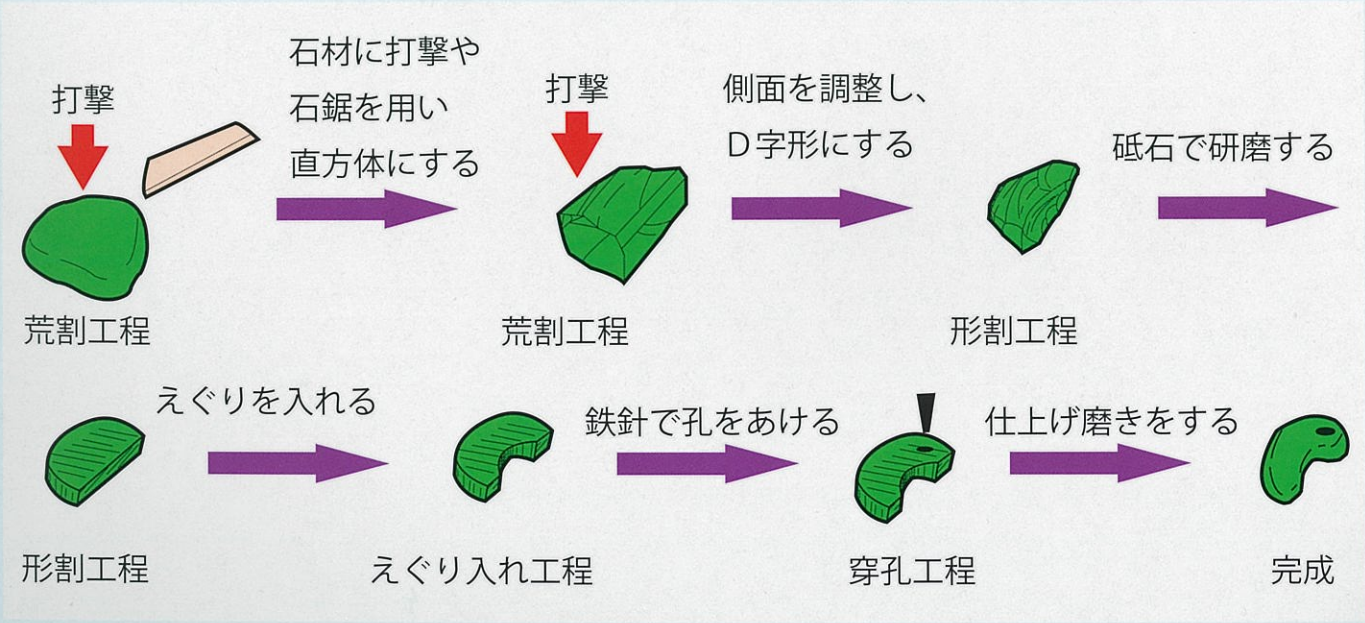
管玉の制作工程は、ムラの外から運んできた石材を、①敲石で石材に打撃を加えて直方体にする荒割工程、②さらに打撃を加えて角柱状にする形割工程、③砥石で研磨し多角柱にする研磨工程、④鉄錐で孔をあける穿孔工程、⑤仕上げ磨きをする仕上磨工程にわけられます。後期と中期の管玉制作工程の異なる点は、石鋸を用いないことと石針の代わりに鉄錐を使用することです。

勾玉の制作工程は、①石材に打撃や石鋸を用い直方体にする荒割工程、②側面を調整し平面形を「D」字形にする形割工程、③砥石で研磨する研磨工程、④えぐりを入れるえぐり入れ工程、⑤孔をあける穿孔工程、⑥仕上げ磨きをする仕上磨工程にわけられます。

工具には敲石、砥石、鉄錐があります。敲石は花崗岩を用いたものです。また、中期と同様に砥石は軽石、砂岩、凝灰岩と肌理が異なるものが見つかっています。鉄錐は本県の初めての出土で全国的にみても出土例が少ない珍しいものです。



管玉の製作工程（弥生時代後期）



勾玉の製作工程（弥生時代後期）

たたきいし
敲石（1/2）

てつきり
鉄錐（1/1）

といし
砥石（1/2）

玉作の工具（弥生時代後期）

あらわりこうていひん
荒割工程品（1/1）

かたわりこうていひん
形割工程品（1/1）

けんまこうていひん
研磨工程品（1/1）

せんこうこうていひん
穿孔工程品（1/1）

くだだまかんせいひん
管玉完成品（1/1）

まがたまあらわりこうていひん
勾玉荒割工程品（1/1）

まがたまかたわりこうていひん
勾玉形割工程品（1/1）

まがたまけんまこうていひん
勾玉研磨工程品（1/1）

勾玉えぐり入れ工程品（1/1）

まがたまかんせいひん
勾玉完成品（1/1）

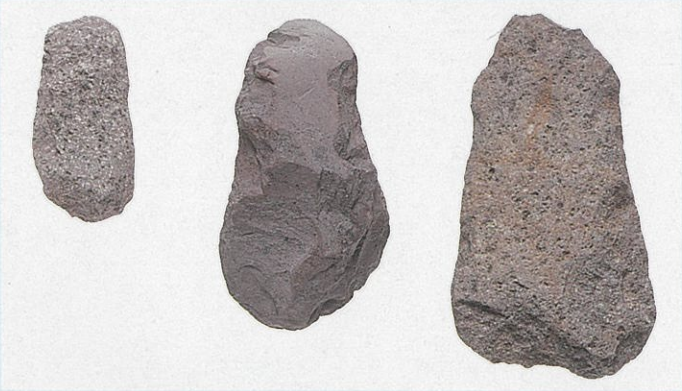
その他の出土品

土器や玉作関係出土品の他にも各時期のムラで使われた様々な道具があります。

縄文時代晩期には打製石斧・石鏃・磨石・砥石がありますが弥生時代初頭では石器はほとんど見られず、生活スタイルの変化があったとも考えられます。

弥生時代中期には、石鏃・石剣・石包丁などの石器があります。

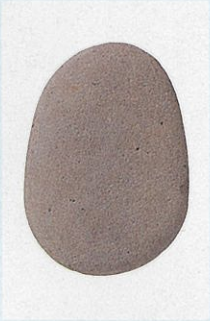
弥生時代後期・終末期には、鍬や水準器ではないかとされる水盛りなどの木製品や石鏃の他ガラス玉などがあります。



打製石斧
（縄文時代晩期、1/3）

石鏃
（弥生時代中期、1/1）

石錐
（縄文時代晩期、1/1）



磨石
（縄文時代晩期、1/3）

水盛り
（弥生時代後期、1/10）

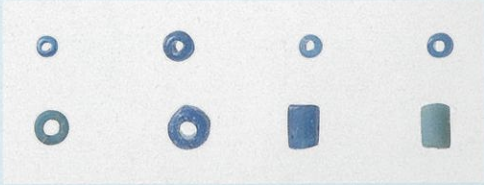
石包丁
（弥生時代中期、1/4）

石剣
（弥生時代中期、1/2）

大型石包丁
（弥生時代中期、1/4）

鍬
（弥生時代後期、1/10）

石鏃
（弥生時代後期、1/1）



ガラス玉
（弥生時代後期・終末期、1/1）

下老子笹川遺跡

発　行　日　　平成27年３月13日

編集・発行　　富山県埋蔵文化財センター

〒930-0115
富山市茶屋町206番3号
TEL　076-434-2814
FAX　076-434-2859

印　　刷　　前田印刷株式会社

このパンフレットは文化庁埋蔵文化財史跡等総合活用支援推進事業の国庫補助金をうけて作成しました。